

茶樹の初回せん枝量と収量との関係

米元孝一・間曾竜一・井上 繁

(宮崎県総合農業試験場茶業支場)

YONEMOTO, T., MASO, R., and INOUE, S.

The Relation Between the First Training and the Yield in Tea Plant.

永年作物である茶樹では、成園化するまでに7～8年を要して、この間収葉量は年々大巾に増加し、成園化後はその程度が緩慢で、やがて品種(系統)本来の収量的特性を表わすようになる。したがって、成園時の収量的特性をは握するまでにかなりの年限が必要であるので、幼木期にこれを予知することができれば、茶樹の育種年限短縮にきわめて有効である。そこで、幼木期の生長量と成園初期にいたるまでの収葉量との関係を継続的に検討した結果、この間に密接な関連性のあることを認めたのでその概要を報告する。

試験材料および方法

試験材料は昭和36年に定植した系統比較試験の20系統、品種(1区22株の3反復)で、このうち16系統は日本種および中国種、あるいはこれらに由来するもので、他の4系統はアッサム種を交配親としたアッサム雑種である。

3年生時に1番茶を摘採し、その直後に仕立てのため初回せん枝を樹姿に応じて行なった。4年生時には1・2番茶5・6年生時には1・2・3番茶を摘採し、初回せん枝量と各年次の収葉量との相関係数を求めた。なお、供試園は生育がよく、6年生時には成園と見なせる程度の園相であった。

試験結果および考察

初回せん枝量と各樹齢における収葉量との相関係数を示したのが次表で、いずれの場合も有意な高い関係が認められた。

まず、1番茶収葉量との関係を見てみると、3年生ではかなり高い相関関係が認められるが、樹齢とともにその関係が徐々に低くなる。一方、アッサム雑種を除外した16系統の場合は、各樹齢ともその関係が高くなっている。これはアッサム雑種が日本種や中国種、あるいはこれらに由来するものと、生育

初回せん枝量と収葉量との相関係数

調査区分 樹令	1番茶収葉量		年間収葉量	
	20系統	16系統	20系統	16系統
3年生	+0.826**	+0.834**	—	—
4 〃	+0.798**	+0.833**	+0.843**	+0.872**
5 〃	+0.678**	+0.746**	+0.720**	+0.797**
6 〃	+0.568**	+0.606*	+0.737**	+0.804**

注) 16系統の場合の相関係数はアッサム雑種の4系統を除外して算出。

特性が異なっていることによると考えられる。日本種および中国種は低木性であるのに対し、アッサム種は高木性であり、アッサム雑種もこの傾向が認められるからである。

次に年間収葉量との関係を見てみると、いずれの場合も1番茶収葉量との関係より、さらに密接となり、相関係数が高い。1番茶の収葉量は寒害や霜害によって影響されることが多く、これによって減収した場合は補償作用により2・3番茶の収葉量が増加する。また、このような障害がなくても収葉量の各茶期の比率は系統によって異なる。したがって、1番茶のみの収葉量に比し、2・3番茶を加えた年間収葉量の方が、系統本来の安定した収量性を示しているものと考えられ、相関係数が高くなったものと思われる。この場合においても、アッサム雑種を除外することにより関係は密接となるが、このことについては前に述べたとおりである。

以上のような関係は形態的特性の樹姿とも関連性があり、開張型の系統(本試験では3系統)を除外して、中間型および直立型の系統のみについてみれば、相関関係がさらに高くなる。

む す び

以上のことより、幼木期の生長量の大部分を示している初回せん枝量によって、成木期初期にいたるまでの収量的特性を推定できるものと思われる。